

〇〇。 ま え が き

古来からわが国の人々は、木肌を現わす建築物の中で育った人々が大半を占めるといっても過言ではない。古来からわが国、日本は「木の国で自然にいきる」といわれ、木と人間とのかかわり合いは、日本の歴史が初まる以前最古の時代にまでさかのぼることができる。わが国の人々にとって自然の恵み、木と水は、暮らしには欠がせない必需品といえよう。現代まで残る建築物はすべて木造建物であり、木肌・杳目を見せた建築様式である。木造建築に示すわれわれの愛着は、永い歴史にはぐくまれて現代に及んでいるのである。

建築様式が洋風化していく中においても、日本古来の様式に愛着があり、住宅の一室を畳敷きとし、長押を付け、窓等に紙張障子付き、小さな床の間や押入れを造りふすま付きとする。この考へは、木肌に対する愛着や座敷様式を持つ国民性のあらわれではなからうか。また、木造建築物で仕上げ造作材が木材や木質材料で構成されることは普通としても、鉄筋コンクリート造などの耐火建築物の内装の一部にも木肌・杳目を見せる仕上げがなおさかんに使用されており、用途によっては、居室を和風様式に構成する設計も多くなっている。木肌・杳目には、人の心に暖か味やすらぎやなどやかさを感じさせるなにものかがうかがわれるからである。

木造建築軸組真壁造りの軸組材おもに柱および造作材を、美しい木目(杳目)をつスギ、ヒノキ、マツ、などで構成されているのは古来からの建築意匠であり、わが国の自然の美を好むものであったが、戦後復興の爲わが国の木材生産は、乱伐の影響を受けて、すぐれた樹木(銘木)は少くなり、大径木からの優良材の激変で産出ができなくなり、これらの樹木は銘木的な価値を持つようになり、コスト的に一般建築等には使用しにくくなっているのが現状である。そのようなことから近来は、量的な充足とあいまって、輸入木材になよって需要をまかない続けている。しかし輸入木材の木肌や色合いは、国内産のものとはちがって、これには異質なものを感ずるのは、国内産の木肌の違いがあり、永いあいだ見てきたためであろう。国内有名産地の木材スギ、ヒノキ、マツ、などの色合い木肌、木目(杳目)に接してきたので当然といえる。

◆ 国内の木材(銘木)

- ◆ 杉材 ～ 吉野杉・秋田杉・春日(あすか)杉・屋久(やく)杉・霧島(きりしま)杉・薩摩(さつま)杉
- 吉野杉。～ 大和地方、伊勢地方に産し、大正時代頃までは「樽丸」といって、多くは造り酒屋の酒樽用材として用いられていた。現在では建築用材として使用され、特に中杳目の天井板(裏板)については他の杉では見ることの出来ない良品を得ることができ、また柱板にも最適であり、杉の成長が早く、色合が薄紅色で斑がなく曲がりも少ないため建築造作材として最上品の杉材と言われ、茶室、数寄屋造りの外廻りの化粧材や造作材として、また建具用材として使用されている。
- 秋田杉。～ 羽後、羽前地方に産する、木質は吉野杉に似ているが、気候風土の違い